

# ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト

赤松林太郎

ポーランド・  
ワルシャワ

♪ 10



ざされた晩秋のワルシャワは、西側諸国より昼がさらに短いこともあり、夜が果てしなく深く感じられた。

2017年10月。霧雨で景色が閉ざされた晩秋のワルシャワは、西側諸国より昼がさらに短いこともあり、夜が果てしなく深く感じられた。

世界に誇る弦楽四重奏団プリマ・ヴィスターと共演した。終演後は雨で冷え切った会場で、ワルシャワの方々が長蛇の列で並んで、演奏の感想を伝えてくださった。この国がショパンの心臓を守る、音楽の国なのだとということを実感した。

1849年10月17日にフランス・パリで亡くなったフレデリック・ショパンは、ついに戻ることで引きなった祖国ポーランドに心臓を戻してほしいと遺言に託した。ショパンの心臓は姉ルドヴィカによつてワルシャワに持ち帰られ、聖十字架教会の柱に納められた。そこにマタイの福音書から「あな

## ショパンの足跡をたどる



リスト像に見守られて立つ  
ショパン像 下 ショパン音楽大  
学近くの壁 いずれもポーラ  
ンド・ワルシャワ(赤松林太  
郎さん提供)



たの富のあるところに、あなたの心もある」という一節が刻まれた。フランス・リストがショパンの評伝を書いたのは、彼が亡くなつたわずか2年後のことだつた。ショパンとリストは共にパリで活躍した19世紀前半のスター・ピアニストで、作品を献呈し合う関係でも

あつた。だから、この評伝は単なる友情の書ではなく、ショパンとリストの精神的な強い結びつきを表しているもので、それぞれの母国が難しい道のりを歩んでいる中で、新しい時代を切り開いていった芸術家どうしの尊敬と信頼が主題にな

つているように思う。そのことはワジエンキ公園でも見ることができる。公園の代名詞である巨大なショパン像を、木陰に立つリスト像がそつと見守つてゐる。ショパンの存在には必ずリストが立ち会う。その尊い関係を未来まで伝えようとしたワルシ

アワの人たちを感じ、私はポーランドに心から敬意を抱いた。ワルシャワのショパン博物館には、ショパンの枕元に飾られている押し花が展示されている。彼がパリのヴァンドーム広場12番地で押した花が展示されている。彼が

帰らぬ人となつた時、ショパンの後継者ともいわれたマルツエリーナ公爵夫人がそこにいた。彼女はマドレーヌ寺院の葬儀で使われた花を押し花にし、終生大切にしていたと伝えられているので、ひとつしたらこの押し花も彼女の手によるものかもしれない。留学地のパリで初めての新年を迎えるにあたり、私はセーヌ川に上がる花火をできるだけ近くで見たいと思い立ち、息を切らしながらたどり着いた先がヴァンドーム広場だつた。

パリ市民がするようにシャンパンを抜いて新年を祝いたかつたが、持ち合わせのほとんどなかつた私には青島ビールの缶が精いっぱいだつた。それでもショパンが息を引き取つた12番地の入り口で、ショパンを感じながら希望のイルミネーションを見たことは一生の宝になつた。お金も将来のあてもなく、パリでつらい日々を過ごしていた異邦人にとって、ショパンは大きな心の支えだつた。

◇原則第2月曜に掲載します。

あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。2歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。洗足学園音楽大客員教授、大阪音楽大特任准教授。神戸市在住。

